【ねがいましては】

第９７号
平成９年８月２８日

共和珠算学習塾

「ねっこ」
『ぼくだけほっとかれたんや』
１年　あおやま たかし　　（すべての怒りは水のごとくに　灰谷 健次郎）

がっこうからうちへかえったら　だれもおれへんねん
あたらしいおとうちゃんも　ぼくのおかあちゃんもにいちゃんも　それにあかちゃんも
みんなでていってしもうたんや
あかちゃんのおしめやら　おかあちゃんのふくやら　うちのにもつがなんにもあらへん
ぼくだけほってひっこししてしもうたんや　ぼくだけほっとかれたんや
ばんにおばあちゃんかえってきた　おじいちゃんもかえってきた
おかあちゃんが「たかしだけおいとく」とおばあちゃんにいうてでていったんやて
おかあちゃんがふくし（福祉）からでたおかね　みんなもっていってしもうた
そやからぼくのきゅうしょくのおかね　はらわれんいうて　おばあちゃんないとった
おじいちゃんもおこっとった
あたらしいおとうちゃん　ぼく　きらいやねん　いっこもかわいがってくれへん
おにいちゃんだけけんたっきーへ　つれていって　ふらいどちきんたべさせるねん
ぼく　つれていってくれへん　ぼく　あかちゃんようあそんだったんやで
だっこもしたった　おんぶもしたった　ぼくのかおみたら　じっきにわらうねんで
よみせでこうた かうんたっくのおもちゃ　みせたらくれいうねん
てにもたしたらくちにいれるねん　あかんいうてとりあげたら　わあーんいうてなくねんで
きのうな ひるごはんのひゃくえんもろたやつもって こうべでぱーとへあるいていったんや
ぱんかわんと　こうてつじーくの もけいこうてん　おなかすいたけどな
こんどあかちゃんかえってきたら　おもちゃもたしたんねん
てにもってあるかしたろかおもとんねん
はよかえってけえへんかな　かえってきたらええのにな

この詩を、私は小１～３年の女の子たち３人に読んで聞かせました。関西弁なのではじめは関東のことばになるべく直して読みました。２度読みました。するとひとりの子が今度は本当の言葉（関西弁）で読んでみて！と、言いましたので（うれしかった)、私はなるべくアクセントも関西弁に近いように読みました。(関西の皆様、違っていたらごめんなさい)

彼女たちは全員、この詩をコピーして帰りました。「おかあさんにはなしてあげるの」ということでした。

この詩の中に脈々と打ち続ける少年のこころの鼓動が伝わったようでした。あかちゃんを思う心、待ち続ける心は「ひと」のお手本です。

現代は競争社会です。競争ですから人が人を押しのける社会です。その中で私たちは「豊か」と呼ばれる生活を作りあげてきました。では、「こころ」も比例して豊かになったのでしょうか。

子どもの頃の一番の宝物、それは「豊かな心」なのではないでしょうか。「ひと」を想うこころを育むことを最優先すること。やがて彼らが成長したとき、「ひとを助ける」ことをあたりまえのようにする姿が街のあちこちで見られること。それが社会生活の中では「仕事」として息づくこと。きれいごとに思えますが、人を押しのけていかなければ生きてゆくことのできない社会から、このように子どもの頃に育んだあたたかい気持ちのまま、毎日を送ることのできる社会を築いていくことが私たち大人の責務だと思います。

ちなみに先の女の子たち３人は、大きな声で「ありがとうございました、さようなら」といって帰っていきました。私のこころに爽やかな風が吹きました。ありがとう。